NO ９１

１学年だより

令和３年９月28日（火）

夢の宅配便

１年学年主任
水野　喜代治

第６話…夕焼け空と変身

古谷先生が私をリレーの選手に急きょ抜擢したことは、あっという間にみんなに知れ渡った。「リレーの選手は入場門に整列してください。」と放送が入る。入場門に行くと「喜代治、頼むぞ、１位でバトンが来るはずだから、抜かれなければいいからな。」と６年生の正ちゃんが心配そうに声をかけてきた。「喜代治、ガラスを割って逃げる時のあのスピードを再現しろ。逃げる時のスピードはオリンピックの選手並だからな」と５年生の光秀ちゃんが笑いながらアドバイスしてくれた。「大丈夫です。俺はウルトラマンに変身して走るから。」と足元に落ちていた木の枝を右手に持って掲げウルトラマンの変身のポーズをした。それを見ていた、女の子たちがクスクス笑った。

変身をするための木の枝を握りしめながら、ウルトラマンになりきってトラックを疾走した。１位でバトンを受け取って、私は必死に走った。上曽我地区の鳥居君（ブー）に差を縮められ抜かれそうになったが、大声援を受けて、なんとか抜かされずに、５年生にバトンを渡した。酸欠になって、大の字になってひっくり返った。空を見ると青空がきれいで、飛行機雲が一本伸びていた。

リレーが１位だったのでご褒美にもらったリボンを胸につけて下校した。正門を出る時に下校指導をしていた津田教頭先生が「喜代治君！、今日はリレー頑張ったね。」と声をかけてくれた。駄菓子屋の前を通ると駄菓子のおばさんが、「きよちゃん、今日は頑張ってたね。おばさん見てたよ。リレーかっこよかったよ。」と褒めてくれた。こんなに、褒められる日は今までになかった。青柳先生に教頭先生に駄菓子屋のおばさんに……。小学校の１年生から幸子おばさんが母のかわりに学校に来てくれた。授業参観も学芸会も運動会も従兄弟の八一ちゃんのお母さんの幸子おばさんが見てくれた。今日、たった、十五分ぐらいの時間だけど、初めて母がお弁当を届けてくれた。おにぎりを包む新聞に手紙が書いてあった。その手紙をみんなが読んでくれた。青柳先生が良かったねと私の頭を撫でてくれた。お風呂上がりのように心がポカポカして、お弁当を受け取った時の手の感触が今も残っている。私は、母が帰宅する６時頃まで鬼柳神社の境内のブランコで一人で遊んで時間を潰した。お寺の鐘がなって、少し経ったので、神社を出て家に向かった。箱根山と富士山が夕日で赤くなっていた。その日の夜は、遅くまでリレーのことやお弁当を本部席で青柳先生と津田教頭先生と食べたこと、おにぎりを包んであった新聞紙を教頭先生にあげたことを母に話した。

次の日から、学校で、キヨたんが授業をサボって教室を抜け出すことはなくなった。たった、十五分のお弁当を届けてくれた時間で、キヨたんのこころの寂しさは満たされた。子どもは、そこに温かい「きっかけ」さえあれば、信じられないような成長をして乗り越える力を持ている。

「第一編完」　　つづく